

## 幕末

### ① 蛤御門

京都御苑西側の門。かつては開かずの門だったが、天明の火災で開門されたことから、焼かれて口を開ける蛤に例えて名がついた。

1863年「八月十八日の政変」で京を追われた長州藩は、復権を図り翌年京都へ進軍した。嵯峨天龍寺を発した国司信濃・来島又兵衛率いる800名は分かれて御所に迫り、蛤御門付近で会津藩・薩摩藩と激戦を展開、来島が戦死した（禁門の変＝蛤御門の変）。門には弾痕が残っている。



### ② 鷹司邸跡

京都御苑正面の堺町御門から入ったところにあった。禁門の変で、山崎から北上した真木和泉・久坂玄瑞ら600名は堺町御門を目指した。久坂は公家鷹司邸に入り、朝廷への嘆願を頼むも聞き入れられず、長州藩は激戦の末敗れた。鷹司邸は幕府方の攻撃により炎上、久坂は同門の寺島忠三郎と刺し違えて自決した。

### ③ 木戸孝允旧邸跡

西郷隆盛、大久保利通と並び「維新の三傑」と呼ばれる木戸孝允（桂小五郎）は、幕末長州の藩政府で中心的存在となり、京都の薩摩藩小松帯刀邸で薩長同盟を結んだ。維新後は五箇条の御誓文の起草や版籍奉還、廃藩置県の実現に中心的役割を果たした。

幕末の京都では、朝廷（御所）を中心に、公家の屋敷を拠点として政局が激動した。その一つ公家近衛家の屋敷だったものを明治に木戸が購入し別邸とした。天皇の京都巡幸に従った際持病を発症し、天皇の慰問を受けるも逝去、東山霊山に葬られた。山口市糸米の旧宅跡地そばの木戸神社に、文武両道の神として祀られている。



長州藩邸跡の桂小五郎像

### ④ 長州藩邸跡

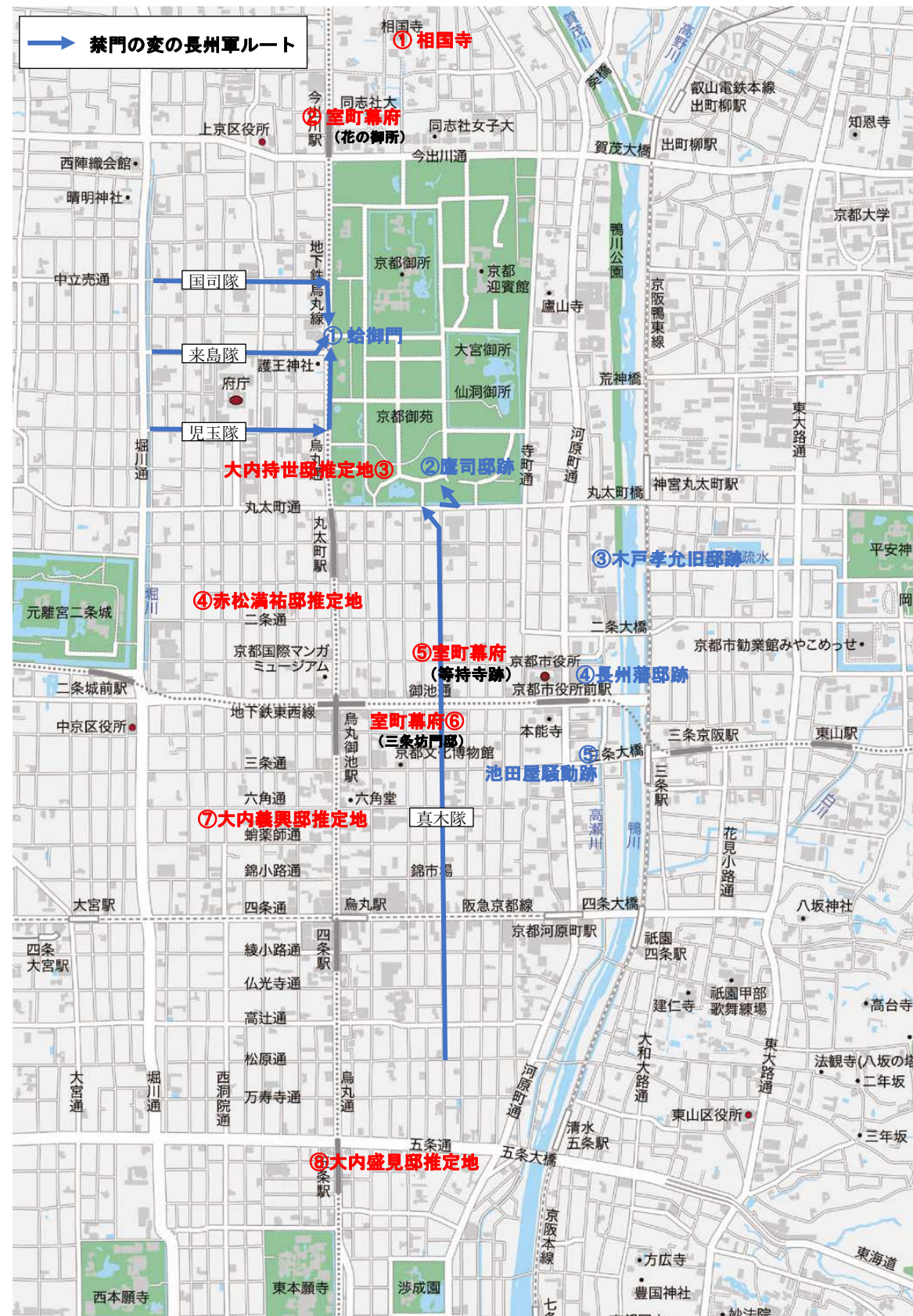
江戸時代初め、高瀬川一之舟入南側に建てられ、幕末には尊王攘夷派の拠点となった。禁門の変で敗れた長州藩は自ら藩邸に火を放って退却した。今の京都ホテルオークラの地で、桂小五郎像・伊藤博文像・大村益次郎遭難之碑がある。

### ⑤ 池田屋騒動跡

禁門の変に至るきっかけとなった事件。三条小橋の旅館池田屋で協議のため集まった長州藩士らが、近藤勇ら新選組に襲撃され、吉田稔麿ら多くの死傷者や逮捕者を出した。桂小五郎は間一髪で難を逃れた。

## 京都市街大内・長州関連史跡図

## 大内氏や長州藩士が駆け抜けた「みやこ」



## 室町時代

### ① 相国寺

応仁の乱勃発に伴い上洛した大内政弘は、東寺から船岡山、相国寺へと陣を移し、西軍の主力部隊として活躍した。激戦となった相国寺の合戦では陶弘房が討死した。（陶弘房の菩提寺は瑠璃光寺）

### ② 室町幕府（花の御所 義満・義教・義政・義晴等）

幕府（将軍邸）は将軍の代によって場所が移っている。足利義満が造った「花の御所」は、上立売通・今出川通・室町通・烏丸通に囲まれた地にあった。「室町幕府」の名称は室町通に表門を開いていたことに由来する。

### ③ 27代大内持世邸推定地

六条にあった大内屋形は大火によって焼失しており、上洛した持世は地元から用材を運び、屋形を花山院南八丁町に新造した。今の京都御苑内宗像神社付近かと思われる。大名屋敷としては最大規模のもので、大内氏の財力のほどを窺わせる。



京都御苑

### ④ 赤松満祐邸推定地

持世邸が造られた翌年、赤松満祐邸で戦勝祝いの宴のさなか将軍義教が満祐に殺害され（嘉吉の乱）、同席していた持世も重傷を負い、ひと月ほど後に新築の屋敷で亡くなった。赤松邸は、西洞院・冷泉（夷川通）・二条に囲まれた地で、陽成院跡（夷川公園）南側にあったとされる。現在一帯に古い建物はあまりみられない。

### ⑤ 室町幕府（等持寺跡 尊氏）

### ⑥ 室町幕府（三条坊門邸 義詮・義持・義隆等）

### ⑦ 30代大内義興邸推定地

義興は、明応の政変で失脚後山口に下向していた足利義隆を擁して上洛、義隆は将軍に返り咲いた。義興は10年にわたって在京し幕政を支える一方、猿楽や犬追物の主催、賀茂競馬の見物も行っている。

義興の宿所は六角油小路にあり、「本能寺の変」で炎上した本能寺跡付近と思われる。剣豪塚原ト伝が食客となっていたとも伝わる。本能寺は「本能寺跡碑」に隣接する区画一帯を占めていたようで、付近の消防団建物も史実を偲ばせる。



### ⑧ 26代大内盛見邸推定地

盛見在京中の屋敷は烏丸・室町・楊梅・六条坊門に囲まれた地にあり、今の五条通南側にあたる。庭園を備え将軍御成もあつたという。

